

# 町長

## ひとりごと

75

齊藤

讓



最近のテレビを見ていると、違(ちが)い切れない気持ちになってくる。

チャンネルをまわせば、あつちもこつちも低俗(ていぞく)なドタバタクイズのオンパレード。そしてグルメ指向(ていこう)だか何(なに)だかしらないが、やたらとラーメン屋(や)や料亭(りょうてい)、旅館(りやういん)などをめぐり歩いては、レポーターなるタレントは異口(いこう)同音(どうおん)に、「おいしい!」を連発(れんぱつ)する。まさに金太郎飴(かねたろうあめ)の如(ごと)き代(か)り映(か)えのない薄っぺらな感じのする番組(ばんぐみ)がいかに多いことか。おまけに、素晴らしい番組(ばんぐみ)だと感動(かんとく)すれば、後(あと)になって「ヤラセ」が入(い)っている。

いま日本(にっぽん)中(ちゆう)が、不景氣(ふけいき)で大騒(おほさわ)ぎをし、国(くに)の景氣(けいき)対策(たいさく)が焦眉(しやうび)の急(いそ)ぎとなつているとき、国会(こくかい)は証人(しやうにん)喚問(くわんもん)をめぐって長い期間(きかん)空

転(ま)を続け、ようやく再開(さいかい)されたと思(おも)えば、肝心(かんじん)の予算(よさん)審議(しんぎ)はそつちのけで、まるで検察(けんさつ)官取(くわんしゆ)りの先生(せんせい)方が金丸(かねまる)脱税(だつぜい)問題(もんだい)などのような疑惑(ぎわく)事件(じけん)ばかりに質問(しつもん)を集中(しゆうしゆう)している変(へん)てこりんな予算(よさん)委員会(いいんかい)の風景(ふうけい)もたまには放映(へいえい)される。

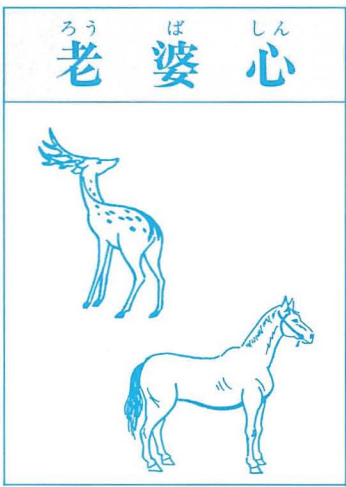
▼もつとも、これはテレビ局(きょく)の責任(せきにん)ではなく、国会(こくかい)の責任(せきにん)である。いまテレビ局(きょく)文句(ぶんく)をいい、喚問(くわんもん)を受ける者(もの)の人権(にんけん)よりも、知らせる権利(けんり)の方がより重(おも)いと主張(しやうけん)している。テレビが社会(しゃかい)の公器(こうき)だというならば、こんな主張(しやうけん)をする前に国会(こくかい)の各(おの)委員会(いいんかい)等の審議(しんぎ)中継(ちゆうけい)を増(ま)やしたり、特に重要な予算(よさん)委員会(いいんかい)の審議(しんぎ)については、国民(こくみん)にわかりやすい本来(ほんらい)の予算(よさん)審議(しんぎ)を展開(てんげん)すべきだと主張(しやうけん)しないのであろうか。私(わたし)には、いまのテレビ報道(ほうど)は、

の方向(ほうこう)が、大衆(たいしゆう)向けの皮相(ひさう)的な面(めん)に多く向(む)けられ、真(ま)に日本の将来(しやうらい)を憂(うれ)える心が欠落(けつらく)し、迫真(はくま)の主張(しやうけん)が欠けてい(け)るような気が(き)してな(な)らない。曾(か)つて、評論家(ひろんか)の大宅(おおく)壮(すけ)一(かず)氏が、テレビの普及(ふくがい)した日本(にっぽん)の将来(しやうらい)を予見(よけん)して、「一億総白痴(いっぴくそうはくち)の時代(じだい)になる」と警鐘(けいしゆう)を鳴(な)らした。私は、不幸(ふこう)にしてこの予見(よけん)が、的(てき)中(ちゆう)しているように思(おも)える。人は反論(はんろん)するかも知(し)れない。「いやなら見(み)なければいいではないか、それを楽(たの)しみにしていい人も多(おほ)勢(せい)いるのだから」と。たしかに視聴者(しやうしんじや)は多(おほ)様(さま)であり、価値観(かちかん)も趣向(しゆきやう)も万(ばん)

別(べつ)であるから、いちがいに低俗(ていぞく)だとか、皮相(ひさう)的(てき)だとか、断定(だんてい)することは危(あや)険(けん)であるが、それは極(ごく)く普通の常識(じょうしき)からみた、程度(ていど)の問題(もんだい)である。

▼特に言(い)いたいことは、電波(でんぱ)は総(そう)て国の管理(かんり)下(か)におかれ、テレビ電波(でんぱ)も公共(こうき)目的(もく)的でその利用(りよう)が許可(きょか)されてい(い)るはずである。町(まち)がいま利用(りよう)している防災(ぼうさい)行政(ぎょうせい)無線(むせん)も同様(どうよう)で、その使用(しやうじよう)にあたりては厳(げん)しい制限(せいげん)がつけられ

ている。以前(いぜん)、有線放送(ゆうせんほうそう)で迷(まよ)い犬(いぬ)のお知らせ(しらせ)をしてたことがあつたが、無線(むせん)になつてからは、これ(こ)すらできなくなつた。先日(せんじつ)の知事(ちじ)選挙(せんきよ)の際(さい)、ある自治体(じちたい)では棄権(きけん)防止(ぼんし)を訴(う)えようとしたところ、問題(もんだい)があるという話(わ)がたつたとい(い)うことも聞(き)いて



た。実際(じつじ)には利用(りよう)したようであるが、このように地方(ちほう)公共(こうき)団(だん)体が利用(りよう)する防災(ぼうさい)行政(ぎょうせい)無線(むせん)には、厳(げん)しい時間(じかん)と放送(ほうそう)内容(りよう)の制限(せいげん)がつけられているのである。

▼中国(ちゆうごく)の古(いにし)いことばに、「鹿(しか)を指(さ)して馬(うま)と為(な)す」という諺(ことわざ)がある。秦(しん)の始皇帝(しやうこうてい)が亡(な)くなったとき、宦官(くわんわん)の趙高(しやうこう)は後継者(こうけいしや)となるべき長子(ちやうし)の扶蘇(ふそ)を計(けい)

略(りやく)によって自害(じがい)させ、暗(あん)愚(ぐ)の末子(まつし)の胡亥(こがい)を帝位(ていゐ)につけさせた。趙高(しやうこう)は権力(けんりき)を思(おも)いのままにし、更に二世皇帝(にせきやうてい)にかわつて自ら帝位(ていゐ)につこうとする野望(やぼう)を持(も)つた。そこで群臣(ぐんしん)が自らに従(したが)うかどうかそれを試(あ)した。趙高(しやうこう)は二世皇帝(にせきやうてい)に鹿(しか)を献上(けんじやう)して、「これは馬(うま)でございませう」といった。二世皇帝(にせきやうてい)は鹿(しか)の間違(まが)いだと居並(ゐ)ぶ群臣(ぐんしん)に問(と)いかけた。ある者は口(くち)をつぐんだまま答(こた)えず、ある者は「馬(うま)でございませう」といつて趙高(しやうこう)におもねり、ある者は正(ただ)直(ただ)に「鹿(しか)でございませう」と答(こた)えた。趙高(しやうこう)はその時(とき)鹿(しか)と答(こた)えたものを、後(あと)に口実(くちじつ)を設(た)けてつきつぎに肅清(しゆせい)していつた。

老婆心(らふしん)ながら、天下(てんか)の公器(こうき)が趙高(しやうこう)の如(ごと)き存在(そんざい)にならんことを、ましてやこれ(こ)におもねて馬(うま)と云(い)う国民(こくみん)、鹿(しか)とも馬(うま)とも区別(くわくべつ)のできない白痴(はくち)のような国民(こくみん)の養成(やうせい)媒体(たいたい)と決(けつ)してならぬことをこいねがつている。